

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



鹿児島大学の 国際貢献

特集

本学のユニークな研究紹介

電子楽譜の分析プログラムで特許出願

鹿大の新たな試み

かごしまルネッサンスアカデミー

アラムナイ追跡隊

指揮者 下野 竜也さん

輝く鹿大生

後藤 千恵美さん

鹿大見てある紀

高隈演習林

なんでも情報版「みみずく」

映画「北辰斜にさすところ」がクランク・イン

民間から広報室長と就職支援室長が就任 ほか



特集 鹿児島大学の 国際貢献

鹿大の特色を生かした 国際貢献をめざして

教育、研究に加え、大学の社会貢献に注目が集まっている。特に地方の国立大学にとって、地域との関わりは切っても切り離せないものだ。

鹿児島大学も自治体や地元企業と協力し、鹿大ならではの研究成果を地元還元している。最近では、焼酎を切り口とした数々の取り組みがその好例だ。

大学の教育・研究の舞台は、

大学の位置する地域にとどまらない。

鹿児島大学は総合大学の強みを生かし、海外を舞台にしたさまざまな共同研究や技術協力による国際貢献を行っている。

だが、鹿大のフィールドは地域や国内だけではない。鹿大は8学部9研究科を擁する総合大学であることを最大限に生かし、現在、海外の大学等との

共同研究や技術協力などを活発に進めている。これまで蓄積してきた研究成果を海外に還元するという意味で、こうした活動は鹿大の国際貢献の一端を担うものだ。

今回は、鹿大ならではのテーマ設定や鹿児島という地域特性を生かした鹿大の国際貢献の例を2つ紹介する。また、2005年10月に設置された国際戦略本部の役割を通して、鹿大の国際貢献の今後のあり方を展望しよう。



特集
鹿児島大学の
国際貢献

フィリピン大学はフィリピン共和国最初の国立大学で、1908年に創設された世界でもトップレベルの大学である。国内に11のキャンパスをもち、そのうちの一つであるUPVは、フィリピンにおける水産学分野の教育・研究で最も重要な地位を占めている。相互のリエゾン・オフィス設置の背景には、水産学部とUPVが1998年から行っている「拠点大学交流事業」がある。この事業は、日本学術振興会(JSPS)が日本の大学とアジア諸国との交流を

目的として実施している10年間の大型共同研究プロジェクトだ。水産学部とUPVのプロジェクトでは、フィリピンの水産業への貢献を目標に、フィリピンの水産資源や水圏環境の開発・管理・保全に関する研究を行っている。「水圏環境・資源」「漁業」「水産社会科学」「増養殖」「水産食品加工」という5つのテーマに分かれ、研究者交流、共同研究や国際セミナーを行い、研究成果を共有してきた。

タンカーの重油流出事故に
調査団を派遣

今年8月にフィリピン船籍タンカーの重油流出事故が発生したフィリピン・ギマラス島周辺海域に、水産学部は翌9月から現地への初期調査団を派遣した。

UPVは事故現場にもっとも近い大学であり、ギマラス島にはUPVの臨海実験所もある(4ページ地図参照)。同実験所は、拠点大学交流事業で水産学部の教員もたび

フィリピン大学ヴィサヤス校との
大型研究プロジェクト

水産学部

目標はフィリピンの
水産業への貢献

2006年4月、鹿児島大学水産学部のキャンパス内に、水産学部と学術国際交流協定を締結しているフィリピン大学ヴィサヤス校(以下、UPV)の日本オフィスが開設された。水産学部も同年2月、UPVのミヤガオ・キャンパスにフィリピン・オフィスを開設している。

的として実施している10年間の大型共同研究プロジェクトだ。

水産学部とUPVのプロジェクトでは、フィリピンの水産業への貢献を目標に、フィリピンの水産資源や水圏環境の開発・管理・保全に関する研究を行っている。「水圏環境・資源」「漁業」「水産社会科学」「増養殖」「水産食品加工」という5つのテーマに分かれ、研究者交流、共同研究や国際セミナーを行い、研究成果を共有してきた。



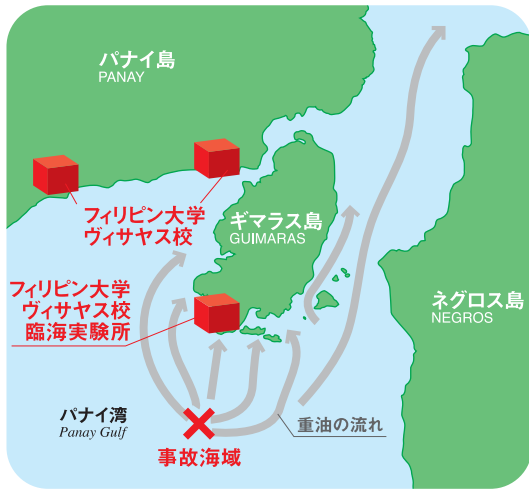
平成12年度国際セミナーのクローリング・セレモニーの様子。右端は松岡達郎水産学部長



レイテ島カンカバト湾における水質調査



2006年4月のフィリピン大学ヴィサヤス校日本オフィス開所式。左からエメルリンダ・R・ローマン フィリピン大学総長、永田行博学長



(地図1)
事故海域周辺地図と
重油の流れ

び訪れている場所だ。
手つかずだったマングローブ林やサンゴ礁、藻場にも被害が及んでいる。特にマングローブ林は、周辺に住む女性たちが枝を炊事用のたきぎとして利用したり、マングローブ林に住む魚介類を獲って生活の糧にしており、貴重な生活基盤となっている。「生活基盤が失われて収入が減るだけでなく、女性の社会的地位が低くなってしまふことも心配している」と松岡達郎

水産学部長。ギマラス島周辺の漁村では事故以降、漁が完全に禁止されている。飲み水の汚染やガスの発生なども確認されており、被害は非常に深刻である。

生かされる10年間の 共同研究成果

水産学部には、1997年に島根県隠岐島沖の日本海で沈没したロシア船籍タンカー・ナホトカ号の重油流出事故の際、調査・研究などにかかわった経験をもつ教員がいる。水産学部海洋資源環境教育研究センターには、油汚染について研究しているグループもある。さらに、約10年間に及ぶ拠点大学交流事業の成果として、事故現場周辺の事故前のデータや共同研究の成果も蓄積されている。

今回の調査は、9月13・14日にUPVキャンパスで開かれた水産学部とUPVによる国際セミナーの際、教員たちが事故現場周辺を訪ね、それぞれの専門的見地から問題点を洗い出す形で行われた。調査の結果は現在、松岡学部長のもとに集まりつつある。今後は調査結果をもとに、水産学部がこの問題の解決にどのようにかかわっていくかを議論していくことになる。

松岡学部長は「このあたりは漁



重油を吸った砂やオイルボムの回収作業



写真上) 重油で真っ黒になったマングローブの根
写真中) ボートが着けないうちや集落のない海岸は重油で汚されたままだとなっている
写真下) カヌーの喫水線下は重油で真っ黒



業と農業しか産業がない地域で、住民の生活が心配。拠点大学交流事業のおかげでこの海域のデータは豊富にある。共同研究の成果を生かし、鹿大としてもなんらかの力になりたい。重油汚染は簡単に解決する問題ではないため、数年単位で取り組んでいくことになるだろう」と話す。

東南アジア全域を見すえた国際貢献の拠点

拠点大学交流事業は2007年

度に期限を迎えるが、水産学部とUPVとの連携はさらに発展した形で続いていく予定だ。

現在の水産学一般に関する研究テーマを、東南アジア沿岸水域の環境・貧困問題の解決に絞り、日本学術振興会の新事業への応募やODA(政府開発援助)事業としての提案をしていく。特に、ギマラス島周辺海域の重油流出事故については、地域の貧困や環境問題が直接絡んでくる。このテーマを盛り込んだ研究テーマの設定がなされる

だろう。

さらに、松岡学部長は今後、東南アジア全域での国際貢献を果たすためにフィリピンにその拠点を置くことを視野に入れていく。「鹿兒島大学フィリピン分校」をつくるのが夢。水産学部は、東南アジア全域を相手に国際貢献を行うというマーケット戦略を持っている。日本人研究者のための一方的な拠点ではなく、鹿大とUPVを中核とした国際貢献の拠点をフィリピンにつくりたい」と語る。

現地の大学と共同で国際貢献のための海外拠点を形成するという戦略は、鹿大の独自性を全国に発信できるだけでなく、日本や世界にとっても大きな財産となる。鹿大では昨年度から「ASEAN+J(Japan)プラン」(7ページ参照)という東南アジアを視野に入れた国際戦略を打ち出している。鹿大の国際戦略の一端を担うともいえるこの大きな取り組みは、今後さらに広がりを見せそうだ。

「離島医療」研修コース

大学院医歯学総合研究科国際島嶼医療学講座

鹿兒島の地域特性を生かした国際貢献

大学院医歯学総合研究科国際島嶼医療学講座(嶽崎俊郎教授)では、国際協力機構(JICA)の草の根技術協力事業「離島医療」研修コースを実施している。この研修コースは、鹿兒島県の提案によりJICAの委託を受けた国際島嶼医療学講座が企画し、

2002年に始まった。

鹿兒島県には28の有人離島があり、不便な交通事情や地理的条件などから、医師不足に悩むところが多い。鹿大では離島の医療充実を目指し、医師の派遣や巡回診療、学生を対象とした離島実習の実施など、さまざまな形で取り組んできている。JICAの「離島医療」研修コースは、鹿兒島県の

地域の特性を生かした鹿大の国際貢献の好例である。

離島医療の最前線での実習

研修では、鹿兒島と共通の地理的特徴や問題を抱える途上国の医師に、離島医療のノウハウを学んでもらう。さらに、医師と住民との距離が近いという、離島医療の良い面を医療に生かす視点を

養うものとなっている。

研修生は毎年、公募で2名選ばれ、約二ヶ月間の研修を受ける。過去の研修生の出身国を見ると、インドネシアやフィリピンといった島嶼地域の多い国々が多い。研修は、離島の診療所での実習が中心となる。甑島、三島、屋久島、奄美大島、与論島の各医療機関に滞在し、離島医療の現場を学ぶ。



屋久町栗生診療所で診察を見学する研修生



研修生の出身国は4カ国に及ぶ
(2007年1月受け入れの研修生を含む)



与論島でタラソテラピーを体験する研修生

離島実習に加え、鹿児島大学病院での研修も行われる。大学病院では、離島医療で特に重要となる内科、外科、小児科などを回り、日々の診療で生じた疑問を解決する機会を提供している。また、鹿児島市内の病院で遠隔医療システムを見学し、県の保健福祉部医務課の職員から鹿児島島の離島医療の現状について説明を受けるなど、さまざまな角度から離島医療を学ぶ工夫がなされている。研修期間の最後の1週間で、研修生は鹿島の教員の指導を受けながらレポートを作成し、発表を行う。レポートの中には学んだことを自国でどのように生かすかという「アクション・プラン」も盛り込まれる。

鹿児島だから学べる さまざまな離島医療

離島医療とひと口にいつても、その内容は島によって個性的なものが鹿児島の特徴だ。例えば、甕島では診療所と福祉・保健センターが隣接・連携した地域包括医療のモデルを、屋久島では医師によるデイケアセンターの立ち上げの事例を学ぶことができる。奄美大島では、バスを使った巡回診療の現場に触れ、与論島では、タラ

ソテラピーや島唄を利用した健康増進法を実践している医師の話聞き体験する機会がある。

国際島嶼医療学講座は、こうした離島医療の現場で医学部生の離島実習を行ってきた。その実績が、「離島医療」研修コースでも十分に生かされ、研修生たちは離島医療の実態を短期間で学ぶことができるのである。

今年度も2007年1月から、東ティモールとフィジーからの研修生を受け入れる予定となっている。「この研修コースは、鹿児島島の離島医療が国際的に貢献できる事例の一つ。ぜひ続けていきたい」と嶽崎教授。鹿児島島の離島医療のノウハウは、海を越えて世界に広がっている。



平成17年度の閉校式。前列右端が嶽崎俊郎教授



特集
鹿児島大学の
国際貢献

鹿児島大学の国際戦略

南に開かれた地理的優位性に立脚し、「食」の宝庫とされるASEAN諸国を視野に入れたアジア・太平洋地域における共生社会の構築を目指す

ASEAN+Jプラン (Japan)

食・健康・環境を先導する
世界的研究拠点形成



※地図中の大学は鹿大と大学間学術交流協定、学部間学術交流協定を締結している

主なテーマ

- 1 フィリピン水圏における水産資源の環境保全開発と利用
- 2 地域特有の疾患責任遺伝子HAMの発症解明と治療
- 3 島嶼地域における離島医療の質的向上
- 4 環太平洋諸国の作物遺伝資源の保護と導入
- 5 東南アジアの熱帯林の再生
- 6 南西諸島地域の農畜産産産関連の機械化・システム化

主な研究施設等

- 1 多島圏研究センター
- 2 総合研究博物館
- 3 国際島嶼医療学講座
- 4 海洋資源環境教育研究センター
- 5 練習船(かごしま丸・南星丸)

鹿大がその教育・研究の舞台を海外に広げることが、質の高い国際貢献の実現だけでなく、これまでつながらなかった研究機関と連携することで、研究の幅が広がるなどの効果も期待できる。鹿大の国際貢献は、国際戦略本部を中心に、新たなステージに向けて動き始めている。

そうした流れの中では、今後、国際戦略本部が鹿大の国際貢献において果たす役割は次第に大きくなるはずだ。対外的には国際戦略本部が先頭に立ち、日本政府、各国政府、海外機関との交渉にあたることで、教員も国際貢献につながる教育や研究により専念することができるようだろう。国際戦略本部には、テーマに沿って、効果的に学内組織をコーディネートする役割も求められる。

新たに設置された 国際戦略本部

2005年10月に設置された国際戦略本部は、矢野利明理事(企画・評価担当)兼副学長を本部長に据え、国際協力機構(JICA)の職員だった高間英俊プログラム・ディレクターが、専任教員として就任した。同本部は学長直轄の組織で、鹿大の国際交流・国際貢献・国

際共同研究を強化するための企画・立案を主な業務としている。理系

から文系まで8学部9研究科を擁する鹿大の特長を最大限に生かした分野横断型のプロジェクトのコーディネートや、政府や国際機関をはじめとする学外との交渉を行っている。

鹿大はこれまで、地域に密着した研究成果を元に国際貢献をする

というコンセプトを持ち続けてきた。新たに打ち出した「ASEAN+J(Japan)プラン」構想のもと、ASEAN(東南アジア諸国連合)

加盟国と日本を含む半径5000キロメートルのエリアをターゲットに、「食・健康・環境を先導する世界的研究拠点」を形成し、鹿大の国際貢献の中核として発展させていく考えだ。

鹿児島大学の 国際貢献の展望

将来的に鹿大の国際貢献は、学部単位、理系・文系という枠を超えた、分野横断的な性格のものが増えていくことが予想される。これからは、一つのテーマに沿って各学部の知恵を結集させ、それぞれの力を発揮するという視点が重要となる。

コンピュータによる電子楽譜の 分析プログラムで特許出願

ヘンデル研究者としての 幅広い活動

市販の音楽CDに入っている、作品解説や歌詞翻訳を掲載した小冊子「ライナーノーツ」を熱心に読む人は多いだろう。鹿大には、このライナーノーツの原稿を多数執筆している教員がいる。

教育学部学校教育教員養成課程音楽教育の田中京子教授は、ヘンデル研究の第一人者。その作品研究のみならず、「村原京子」の筆名で多数のレコードやCDのライナーノーツを執筆してきた。ほかにも、音楽雑誌への寄稿やNHKハイビジョン番組「オペラへの旅〜ヘンデルオペラへの愛に生きたコスモポリタン〜」の監修、音楽会のプロデュースなど、幅広く活動し、来年1月には、霧島国際音楽ホール（みやまコンサール）でのバロック音楽会「みやまの音楽宝箱〜音楽愛好貴族の華やかな一日〜」をプロデュースする。

バロック音楽研究、特にヘンデル研究の第一人者としてその名を知られている田中京子教授。作品研究はもとより、レコードやCDのライナーノーツを多数執筆し、テレビ番組の監修なども行ってきた。最近では、長年のバロック音楽研究から生まれたコンピュータによる楽譜分析技術で、教育学部初の特許を取得した。

教育学部学校教育教員養成課程音楽教育 教授

田中京子

たなか・きょうこ／

1941年東京都生まれ。東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程音楽学（西洋音楽史）専攻修了。東京芸術大学助手を経て、76年鹿児島大学教育学部講師就任、(翌77年助教授)、87年から現職。03年4月から鹿児島県音楽教育連盟会長も務める。研究室は鹿児島市郡元1-20-6、TEL/FAX 099-285-7899



*1 「みやまの音楽宝箱〜音楽愛好貴族の華やかな一日〜」
日 時／2007年1月28日 14:00開演
入場料／（全席自由）一般2,000円 高校生以下1,000円
場 所／霧島国際音楽ホール（みやまコンサール）



1	2
3	4

田中教授がライナーノーツを執筆したCDの数々。その大部分が専門であるヘンデルの作品を収録したものだ。写真は 1.ヘンデル作曲の「メサイア」 2.「ベルザツァール」 3.「セメレ」（いずれもDeutsche Schallplatten）、4.バッハ作曲「フルート・ソナタ」（Deutsche Grammophon）



ヘンデル作曲「メサイア」の初版本

田中教授が所蔵する「メサイア」初版本。ヘンデルの没後1767年、初版楽譜が出版された。予約出版だったこの楽譜の巻頭には予約者リストが付され、その筆頭に“The KING”の文字が見える

作曲家の意図を視覚的に見せる電子楽譜

田中教授はバロック音楽の研究から、コンピュータによる電子楽譜分析プログラムを考案し、特許を取得している（2006年3月取得）。

楽譜をコンピュータで読み込み、音の上行・下行を十・一付き差分情報で数値化する。上行・下行のパターンが似たメロディ、その逆行・逆行、さらにあるメロディに似た部分などのくらいあるかを%指定で拾い出し、色分けするというものだ。学生がこの色分けした電子楽譜を使うと、通常の楽譜だけで演奏したときよりも「立体的な演奏になる」と田中教授はいう。「音楽は演奏者の感覚で演奏するものと思われがちですが、それぞれのメロディには作曲家がさまざまな感情を込めています。電子楽譜は作曲家の意図が視覚的に見えるから、意識して演奏する。その結果、より表情豊かな演奏ができるんです」。

教育学部初の特許を取得

人間の感情をどう表現するかという「アフエクテンレーレ」が

重視されていたバロック音楽は、それぞれのメロディが特定の感情を表現しているという。そのため、バロック音楽を研究する上でメロディの抽出・分析は欠かせない。田中教授は過去、その抽出を手作業で行ってきた。

「古い時代の研究をしていると、新しいものに挑戦したい、という気持ちが出てきます。夜中までコツコツと一小節ずつ詳查してきたことをコンピュータでできたら、と考え始めたのが研究のきっかけです」。バロック音楽とコンピュータ。一見かけ離れて見えるものの組み合わせが、新しい視点から楽譜を読み解くアイデアを生んだ。

このアイデアは、ソニー株式会社との協力を得て日米の特許を取得、鹿大教育学部初の特許取得となった。日本での出願の1年後にはソニーの国際特許出願に選ばれ、米（2005年7月取得）、EU（特許出願中）への出願につながった。今後、ソニーとの共同でソフト開発が本格的に始まる。メロディだけでなく、リズム、ハーモニーのパターンまで分析できるソフトを目指している。

新しい音楽教育を鹿児島から発信

大学では、音楽学を中心にピアノ、音楽療法など幅広く教える。鹿大にはプロの音楽家や優れた音楽の教員を輩出してきた土壌がある。

「ここにはダイヤモンドの原石がたくさん転がっています。原石は機械磨きしすぎると壊れてしまうけど、鹿大では学生の自主性を大事にする。教員は方向づけをするだけ。ここでの時間を経て、彼らは大変な勢いで伸びていきますよ」。

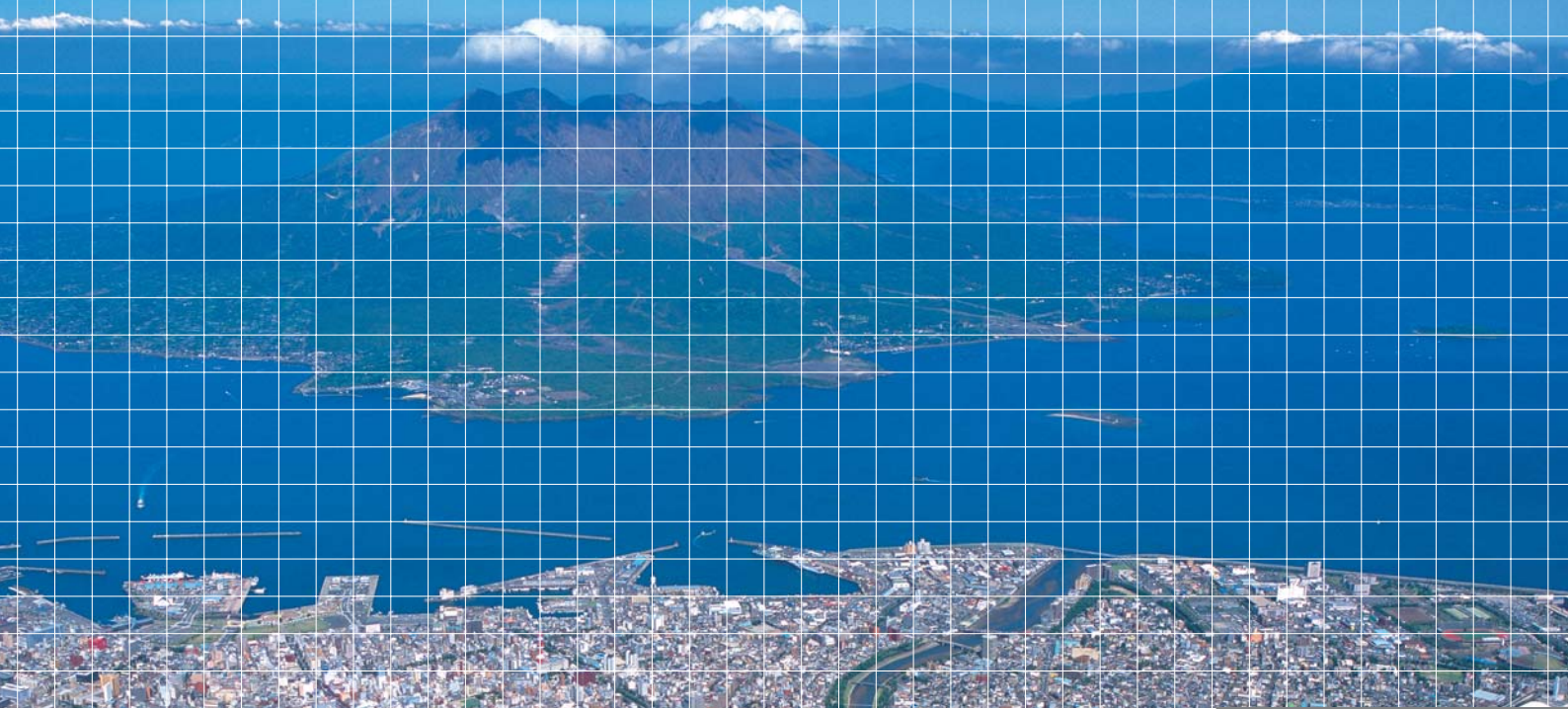
2003年からは鹿児島県音楽教育連盟会長も務める。現場の教師や生徒と語る中で、大学人として県の音楽教育をどう支え発展させるかということ、今まで以上に考えるようになったという。「この世に生まれたからには、ありったけの知識を次の世代に伝えていくのが使命」と田中教授。音楽教育は総合教育、という信念の下、音楽を聴いたり楽器を演奏するだけでなく、作品が生まれた社会的背景や、音楽と他教科との関連を重視した音楽教育を鹿児島から発信したいと考えている。

*3 逆行

あるメロディの始まりと終わりを逆にし、反対側から演奏すること。

*2 反行

あるメロディを上下を鏡に映したようにして演奏すること。



鹿大の新たな試み

Challenges of
Kagoshima
University

鹿児島を活性化させる現代の「アカデミア」

～かごしまルネッサンスアカデミーが開講～

鹿児島大学は鹿児島県や地元企業と連携し、この秋から「かごしまルネッサンスアカデミー」を開講する。焼酎や黒酢などに代表される鹿児島の食産業に貢献できる人材を養成する、新しい教育組織として期待されている。

鹿児島を活性化させる
人材を養成

健康・本物志向が高まる中、食をテーマにしたテレビ番組が人気を集め、人々はうまいものをこぞって買い求める時代になった。こうした時代の流れは、日本の食の供給基地の一つである鹿児島県の発展にとって、大きな追い風といえる。

鹿大は今年11月から鹿児島県、地元企業などと連携し、焼酎、黒酢などに代表される鹿児島の食品産業を担う人材を養成する「かごしまルネッサンスアカデミー」(永田行博アカデミー長)を開講する。鹿児島県の主要産業である食品産業が活気づくことで、鹿児島県全体のレベルアップも目指す。アカデミーは文部科学省の平成18年度科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」事業に採択され、今後5年間で約2億5千万円の補助を受ける。

受講生は、食品産業や観光業に携わる人や自治体関係者などの社会人を対象とし、書類選考で選ばれる。授業料は原則無料。3つのコースに分かれ、授業は夜間と土日の講義や夏期の集中講義が中心となっている。

アカデミーの3つのコース

●食の安全管理コース(定員10名)

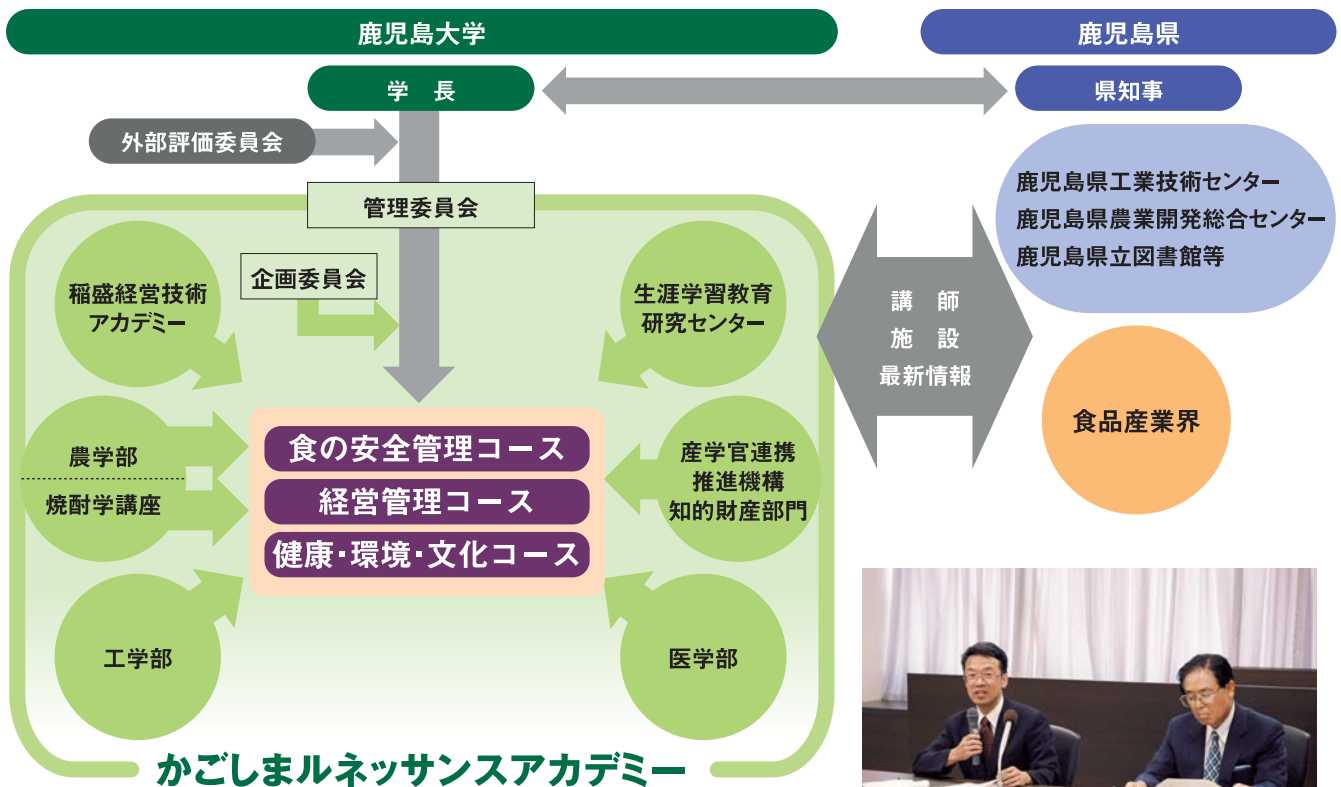
食の安全管理コースは、鹿児島県の産業の四割を占める食品産業で働く人々を主な受講対象としている。食品を安全に生産するため、発酵や腐敗と密接な関係をもつ微生物に関する知識・技術、品質管理システムの国際規格ISO、知的財産の取り扱いを学ぶ。鹿大には、食の安全や微生物に関する専門家がそろっている。このコースは、鹿大がこれまで産学官連携で培ってきた研究成果が十分に生かされているといえるだろう。

「安全や品質管理の十分な知識があれば、世界標準を超える県独自の安全・品質基準を自らつくることができる。大企業も町工場も同じ基準を守ってこそ、真の鹿児島ブランドが信頼に足るものになる。このコースではそのバックアップができると考えている」とコース責任者の安部淳一教授(農学部)は話す。

●経営管理コース(定員10名)

すでに鹿大に設置され実績をあげている稲盛経営技術アカデミーの全面的な支援のもと、経営のノ

■かごしまルネッサンスアカデミー組織図



かごしまルネッサンスアカデミー

*かごしまルネッサンスアカデミーについてのお問い合わせは・・・
 鹿児島大学学術国際部研究協力課内
 かごしまルネッサンスアカデミー事務係
 TEL 099-285-3229 FAX 099-285-7037



かごしまルネッサンスアカデミー受講生募集の記者発表風景。
 右から永田行博学長、安部淳一学長補佐(産学官連携担当)

ウハウを学ぶのが経営管理コースだ。食品産業の経営者やその後継者、技術者などを受講対象としている。ブームだけを頼りに商品売って、ブームの終わりとともに産業そのものが衰退しかねない。安定した経営を続けるため、商品の研究開発、デザインや販売に至るまでを戦略的に考える力を身につける。講師陣は稲盛経営技術アカデミーの講師を中心に、学外から招聘した経営学や会計学のプロも加わる予定だ。

コース責任者の隅田泰生教授(大学院理工学研究科)は、「稲盛経営技術アカデミーは『地元産業の支援』も使命の一つに掲げている。稲盛アカデミーの人脈・ノウハウ・講義を最大限に活用し、多めに学んでほしい」と話す。

●健康・環境・文化コース (定員30名)

健康・環境・文化コースでは、環境と両立した経済発展や、食に関する健康、文化などについて総合的に学ぶことができる。内容が幅広いいため、生涯学習教育研究センターが全学部・全学内共同施設のコーディネートを担当し、学内外の専門家や県の職員などが協力して、指導にあたる。コースでは、学

んだことをもとに鹿児島島の魅力や県内外に情報発信し、新しい産業や暮らしのあり方を考え、受講生自身がそれを実践・指導していける立場に就くことを最終的な目標に掲げている。

コース責任者の小栗有子助教(生涯学習教育研究センター)は「今の現状に課題を感じている人、受身に終わらず、自分から広げていこうとする志のある人に来てほしい。解決のヒントがつかめるはず」と話す。

大学の教育力を生かした新たな教育の場

今後は文部科学省からの資金援助がある5年間でアカデミーの運営を軌道に乗せ、援助終了後もシステムとしてさらに発展させていく予定だ。かごしまルネッサンスアカデミーは鹿大を舞台としながらも、学部や大学院の授業、公開講座のいずれとも異なる新しい教育組織。対話が重んじられたプラトンのアカデメイアのように、それぞれの専門分野で活躍する社会人が学び合い、教え合う組織を目指している。お互いが磨き合う空気を大切にしながら、大学ならではの教育力を最大限に生かした教育の場となるだろう。

interview

Tatsuya
SHIMONO

鹿大の音楽科ほど、
面白いところはなかったですね。

指揮者 下野 竜也さん

● profile

1969年鹿児島市生まれ。1992年鹿児島大学教育学部音楽科を卒業後、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室に入学。1996年キジアーナ音楽院でオーケストラ指揮のディプロマを取得。1997年から1999年まで大阪フィルハーモニー交響楽団指揮研究員として、故朝比奈隆氏の薫陶を受ける。1999年文化庁派遣芸術家在外研修員に選ばれ、ウィーン国立音楽大学に留学、2001年6月まで在籍。2000年第12回東京国際音楽コンクール<指揮>優勝(第1位)と斎藤秀雄賞受賞、2001年第47回バザンソン国際指揮者コンクール優勝(第1位)で一躍脚光を浴びる。その後、国内の主要オーケストラとの度重なる客演をはじめ、数々の海外オーケストラとも客演を果たす。2002年出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。2006年11月読売日本交響楽団の初代正指揮者に就任。秋山和慶、黒岩英臣、石井調、広上淳一、チョン・ミュンファン、ユーリ・テミルカーノフ、レオポルド・ハーガー、湯浅勇治、エルヴィン・アッツェルの各氏に師事。

9月29日、下野さんは母校である甲南高等学校の創立百周年記念演奏会に招かれ、ベートーヴェン作曲の交響曲第9番(第九)を指揮した。「初めて第九を聴いたのは高校1年のときでしたが、高校3年のときに聴いた第九に感動したんです。指揮は、鹿大の大先輩の末廣誠さん。素晴らしい演奏で、『いつか第九を指揮してみたいなあ』と思いました。この曲には世界の人々の気持ちをつかむ、圧倒的なものがあると思います」

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。
各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や
留学生などのユニークな活動を紹介します。

指揮者への憧れを抱いた 初めての第九

小学5年から器楽部でトランペットを吹いていました。小学6年からはMBCジュニアオーケストラ(現在のMBCユースオーケストラ)に入り、中学校・高校の吹奏楽部でもトランペットを続けていました。高校3年のとき聴いたベートーヴェンの第九に感動して、指揮者を志す気持ちが強くなりました。でも、なれるかどうかわからないし躊躇するところもあったので、音楽科で勉強をしながら考えようと鹿大に入りました。

鹿大の音楽科ほど 面白いところはない

あまり真面目な学生ではありませんでした。大学ではトランペットを続けながら、ピアノや声楽など幅広く音楽を学びました。鹿大の音楽科みたいに、あんなに面白いところはなかったですね。人数が少なく、家族みたいで。男はさらに少なくて、1年から4年まで合わせても10人いなかったから、とても仲が良かった。男子学生と男の先生だけで月1回、もつ鍋屋で飲み会をしていましたよ。

鹿大の先生方は、学生が何をしたいのかということを大事にして

くださっていました。僕たちが意思表示をすれば、「じゃあ、もっとこういう努力をしろ」とアドバイスをくださるという感じ。鹿児島大学学友会管弦楽団に入

ったからは指揮をする機会も増えました。東京からプロの指揮者や演奏家の方々をお招きする機会があったのですが、プロのレベルの高さや指導力、指揮の楽しさと同時に難しさも知り、「もつと指揮を勉強したい」という気持ちが出てきました。それは高校のときの気持ちとは比べものにならないくらい、大きいものでした。

大学4年の4月に担当教官の石井調先生(故人)にご相談したら、「やればいいやらい」って背中を押してくださいって。先生のおかげで今の僕があるんだと思います。ブルームスの交響曲第2番の卒業論文を書き、卒業演奏会でその曲を指揮させてもらって卒業しました。



音楽科のレッスン室でピアノを弾く
大学4年生の下野さん

指揮者は作曲家のしもべ

指揮者は、過去の名演奏の再現者じゃなくて、作曲家のしもべなんだと思っています。

ウィーン留学のとき、作曲家の様式を徹底的に学びました。モーツァルトはこう、ベートーヴェンはこう、とそれぞれの作曲家には様式があつて、それを踏みにじるような演奏はしちゃいかんということ。西洋で生まれた音楽の様式を学ぶという事は、畳の部屋に靴で上がらないことと同じ。ウィーンの文化にとつて、日本人は部外者なんです。その部外者が様式を変えられるのはあり得ない。日本の能も、狭い舞台やさまざまな制約の中でどこまで表現できるか、というところに美がありますよね。指揮者は、作曲家の様式は熟知した上で、楽譜になぜこう書いてあるかというのを突き詰め、作曲家の意図を表現していくのが仕事なんだと思っています。

生意気で向こう見ずなのは 学生の特権

去年の夏、鹿大で「指揮法」の集中講義を担当しました。うれしかったのは、学生がみんな素直で、勉強しようという意思にあふれていたこと。将来、教師として指揮をする学生たちには、自分は教師である以前に音楽家なんだという感覚を持ってほしいと思っています。

学生のうちには生意気でいいけど、親や先生や地域の人たちに対して感謝する気持ちは必ずどこかに持っておいて損はしないですよ。生意気で向こう見ずなのは学生の特権だし、そういう気持ちはないと前に進むことはできない。でも、自分が今いる環境は自分が選んだ選択肢だとしても、それを留意してくれたのは周りの人間なんだということを忘れないでほしいですね。



リハーサルでは、大勢の人々を言葉や表情、指揮棒でまとめ上げていく。「せっかく演奏するのだから、その曲をさらに好きになってもらえたら」



「ブルックナー 交響曲 第0番 二短調」(エイベックス・クラシックス)を2006年7月にリリース



全日本青少年英語弁論大会の様子

平成18年6月、兵庫県で開催された
ホノルル市長杯第36回全日本青少年英
語弁論大会で後藤さんは大学の部3位
に入賞した。

「多様化する価値観の時代を考える」
をテーマに開かれた今大会に、後藤さ
んはE S S (英会話研究会)の活動の一
環として出場。国際化が進み多様化した社会で自分た
ちにできることについて訴えた。

「いざステージに立つとやっぱり緊張しました。けれ
ども、インターナショナルナイトを通して感じた苦労
や喜び、考えたことを、自分の言葉ではっきり主張する
ことができました。これまで留学生会のサポートとして
いろいろなイベントに携わってきて、ひとつのイベ
ントが終わるたび、苦楽を共にした仲間と、文化や年
齢、言葉乗り越えた、充実感を分かち合いました。そ
の体験は、国籍にとられずお互いを認めあうという、
国際化への意識をもつ第一歩になると思うんです。留
学生のためだけでなく、日本人にとってもこの体験が
必要ではないでしょうか」

後藤さんの両親は、カラモジア留学生のホストファ
ミリーとして留学生を受け入れてきた。そうした留学
生と交流する中で日本とアジアの国々の間にある貧富
の差に関心を持ち、地域に密着した経済学を学びたい
と鹿児島大学に入学。将来の夢である外務省専門職を
目指し、開発経済学を専攻している。

高いレベルの英語習得のため、毎週2回授業後に行
っているE S Sの活動だけでなく、時には留学生と協
力し合い毎日勉強に励んでいる。丁寧でしっかりとし
た口調で夢を語る後藤さんは、夢へ向かって着実に進
んでいる。



皆村武一教授とゼミ室にて



留学生の友人の買い物を手伝うことも多い

国際化への第一歩は、
国籍にとられず苦楽を
共に体験することだと思
います。



後藤千恵美さん
法文学部経済情報学科2年



ナナイロコトバ
私の座右の銘

「進歩」

何か物事を新しく始めるとき、いつも最
初から器用にこなせるタイプではない
ので、いつも少しずつ努力を積み重ねて、
“進歩”することを心がけています。

***2 カラモジア留学生**

NPO法人からいも交流(鹿児島県鹿屋市)が行っている
国際交流活動(からいも交流)の一環としてタイやマン
マーなどアジアの農村から招いた留学生。後藤家も含め、
留学生受け入れ家庭は鹿児島県全土に広がっている

***1 インターナショナルナイト**

鹿児島大学留学生会が主催するイベント。留学生の企画
運営を、日本人学生がサポートしている。留学生と地域の人々
との交流の場として、毎年一回11月か12月に開催している。
昨年は、20ヶ国以上の料理が並び、600人もの人が集まった

あゝ鹿大見て

演習林の最高峰ビシャゴ岳 (885m) を演習林事務所より望む



キャンプ実習での課題解決ゲーム



生物環境学科の森林計測実習

鹿児島大学キャンパスあんない
Welcome to our Campus

「農学部附属高隈演習林」

桜島の東隣りにある高隈演習林(垂水市)は、鹿大の教育・研究のための森林です。1909年に国立鹿児島高等農林学校の演習林として設置され、1949年の学制改革の際に鹿大の演習林として受け継がれました。

ここには83種の鳥類、301種の樹木、693種類の草本という多様な動植物が息づき、湧き出る清冽な水は、鹿大ブランド焼酎の仕込み水・割水に使われています。こうした豊かな自然環境の中で森林・林業・環境の専門家を育てようと、農学部生物環境学科を中心に鹿大の共通教育科目や農学部の他学科、さらには他大学の教育・研究に利用されています。

学外向けの利用としては、気軽に散歩のできる見学コースや森の不思議や楽しみ方を伝える公開講座、小学校と連携した総合学習プログラムなどを実施しています。特に、農学部と教育学部の学生が専門課程の授業として企画・実施する小中学生向けのキャンプ、「我ら森人」は好評を博しています。

現在、高隈演習林と地元大野地区を拠点とし、環境やESD(持続可能な開発のための教育)を学ぶ「大野ESD自然学校」の設立準備を垂水市と共同で進めています。鹿児島大学の新しい教育と地域貢献のかたちが期待されます。

*高隈演習林は教育・研究を目的として、車での通行などに制約がありますが、一般の方の見学も可能です。詳しくは下記へお問い合わせください。



川の源流探検

教育・研究と地域貢献に資する森



鹿児島大学農学部附属高隈演習林事務所
〒891-2101 鹿児島県垂水市海潟3237
TEL 0994-32-6329 FAX 0994-32-7665
URL <http://agri2000.agri.kagoshima-u.ac.jp/~takakuma/>
E-mail tf-somu@agri.kagoshima-u.ac.jp
月～金曜日(祝祭日を除く) 8:30～17:15





10月8日、鹿児島市の県政記念館で七高生と五高生の攻防シーンが撮影されました。拡声器で指示を出しているのは神山征二郎監督



ほくしんななめ
▶ 映画「北辰斜にさすところ」がクランク・イン
～伝えたい志がある。残したい想いがある～

物語の舞台は鹿大の前身、七高造士館

鹿児島大学の前身である旧制第七高等学校造士館の野球対抗戦を舞台にした映画「北辰斜にさすところ」の撮影が10月1日、熊本市でクランク・インしました。鹿大をはじめ、鹿児島県内でのロケも予定されています。

監督には「ハチ公物語」「遠き落日」「月光の夏」「草の乱」などで知られる神山征二郎さん、脚本は自ら俳優としてもテレビ・映画・舞台などで活躍する、室積光さん。キャストには三國連太郎さん、緒形直人さん、林隆三さん、鹿児島県出身者の坂上二郎さん、三遊亭歌之介さんが名を連ねます。

映画では、七高造士館と五高（現在の熊本大学）の野球対抗戦を軸に、三國連太郎演じる七高造士館出身の主人公が、学生時代の出来事や戦争体験を孫に語ります。主人公の思いに打たれて鹿大に進学した孫が、熊大との野球部交流試合に出場するというストーリーです。

*この映画についてのお問い合わせ
映画「北辰斜にさすところ」製作委員会
鹿児島事務局本部長 藤田紘一
〒891-0065 鹿児島市郡元1丁目21-30(鹿大法文学部内)
TEL 099-250-3211 FAX 099-285-3575

人間の弱さと向き合いながら生きる

映画を着想したのは、鹿児島大学法文学部の卒業生の廣田稔さん（熊本県人吉市出身）。大阪府で弁護士として活躍する廣田さんは、現在、製作委員会の代表も務めています。

鹿大に入学したころの自分を、「鼻持ちならない人間だった」と表現する廣田さん。しかし、鹿大で素晴らしい先輩たちと出会い、考えが変わったと言います。「映画の取材で、旧制高校の下級生は上級生から『天才的なバカになれ』と言われていたという話を聞きました。自分は大した人間ではないということを悟れば、生かされていることへの感謝の気持ちが生まれ、公共のために尽くすという気概も生まれる。自分が映画を通して言いたいことはこれだ、と思いました」。

廣田さんはさらに、「例えば、監督や自分も、お互い欠点を持っていることを認め合いながら仕事をしている。人間の弱さと向き合いながら、それを生活の糧にすることが生きるための術。旧制高校の学生の姿を通じて、そのことを映画で伝えたい」と映画への意気込みを語ってくださいました。

映画「北辰斜にさすところ」は今年中に撮影を終え、2007年の公開が予定されています。



映画制作を応援しようと結成された第1回応援団「おこそう！さつまの風」全体会議の様子



映画「北辰斜にさすところ」製作委員会代表の廣田稔さん

▶ 民間から広報室長と就職支援室長が就任

今年、鹿児島大学の広報室と就職支援室に新しい室長が就任しました。



広報室長
平原 彰子

ひらはら・しょうこ／
一橋大学社会学部を卒業後、リクルートに入社。2001年のリクルート退社後、フリーのマネージャーナリスト、ファイナンシャルプランナーとして活躍。2006年10月から鹿児島大学総務部総務課広報室長。

大学を卒業後、リクルートに入社し、21年勤めました。リクルートでは、雑誌の編集が主な仕事。海外旅行情報誌「エイビーロード」やマネー情報誌「あるじゃん」を立ち上げ、編集長を務めました。高校生向けの進学情報誌や、私立大学の広報の仕事をした時期も数年間あります。事業の創業に携わることが多かったため、今回、広報室の立ち上げから参加できるところにも魅力を感じています。

これからは、大学の人間として一般の方に大学の情報をどのように発信していくかを考えることになりませんが、発信の仕方を考えるという点ではこれまでの仕事と同じですから、今までのキャリアを活かしたいと思います。私は鹿児島市の出

「鹿児島大学ブランド」構築に向けて

身で、高校まで市内にいましたが、鹿大のことを十分に知っているとは言えません。まずは、鹿大がどんな大学なのかということ、自分で取材して体で覚えていきたいですね。

広報室長の仕事は、鹿児島大学のイメージを向上させることです。鹿大ならではの誇れるものを皆さんに認知してもらえるような「鹿児島大学ブランド」をつくり上げたいと思って

います。そのために、先生方の魅力的な研究を発見したり、学生さんたちと交流の機会を持って、在

学生がどこに魅力を感じているかを探ったり、大学を開放して、市民の皆さんと交流したりということから始めようと考えています。そうしたことから、鹿児島大学ブランドとは何かという問いへの答えがみつかるのではないのでしょうか。

鹿児島県は、都道府県のイメージ調査などで上位に入るイメージの良い場所で、私も鹿児島出身であることに誇りを持っています。鹿児島の風土と鹿大は切っても切り離せない。ふたつを結びつけて、学生が学ぶ場所にとどまらない、鹿大の存在意義を打ち出していきたいと考えています。



就職支援室長
下田 智子

しもだ・ともこ／
東京大学教育学部学校教育学科を卒業後、東京の外資系コンピューター企業に就職。7年前から鹿児島県内の専門学校で就職指導を担当。2006年6月から鹿児島大学学生部学生生活課就職支援室長。

高校3年の夏に県外に引っ越すまで、鹿児島市で育ちました。大学を卒業後、東京の大手外資系コンピューター企業に就職しました。その後、転職などを経験し、7年前から鹿児島で働いています。

鹿児島では、県内の専門学校で就職指導や学生募集の他、学校運営全般を担当していました。就職指導の中身は、筆記試験対策やビジネスマナー、応募書類の書き方、面接指導などで、鹿児島大学の就職支援でも行っていることです。自分自身が新人の時に企業で受けた約1年半の研修の内容や実務経験を元に、学生にアドバイスしてきました。

知人から、鹿大が就職の専門職を募集していることを聞き、今までの経験やスキルが生かせるかもしれないと思い、チャレンジする気持ちで応募したところ採用され、今に至ります。

自身の体験を生かした就職支援を

就職支援室長としての仕事には、就職支援のための様々な企画の実施や求人開拓の他、就職相談、応募書類の書き方や面接の指導なども含まれます。鹿大は総合大学であるため、あらゆる業界が就職の対象になります。今は着任したばかりで分からないことも多いため、業界研究も必要ですし、県内の企業を回って情報収集や求人のお願ひにも努め

ています。

鹿児島大学では、キャリアデザイン、バスツアー、大規模な学内合同企業セミナーなど、就職支援の企画をどんどん打ち出しています。これらは今後も発展させながら、新しい取り組みも検討中です。

今後、個別相談や模擬面接専用の部屋をつくる予定もあります。また、携帯電話やパソコンからも使える求人検索システムの構築も計画しています。

私自身、転職経験もありますし、子育てもしながら働いてきました。自分の体験から、女子学生にアドバイスできることも多いと思います。学生の皆さんには支援室にもっと気軽に足を向けてほしいですし、「こんなこと聞いていいのかな」と思わず相談してほしいですね。

▶ 日本政策投資銀行と 連携協定書を締結

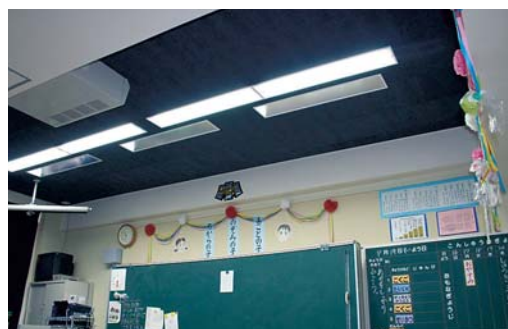
本学と日本政策投資銀行は、5月31日に「産学官連携・地域連携」を主たる目的として連携協定を締結しました。

今回の協定締結は、これまで教育、産業振興、まちづくり等の個別分野で協働してきた両者が、大学の知的財産と同行の金融・ビジネスのノウハウを合わせて包括的に活用することにより、より一層の地域社会への貢献を図ることがねらいです。

今後、具体的な連携事業を協議する機関として「連携推進会議」を立ち上げ、また、昨年包括連携協定を締結している鹿児島県工業倶楽部等とも緊密な連携を図りながら、産学官連携・地域連携の地域のプラットフォーム的な組織づくりを視野に入れて活用していく計画です。



調印式の様子。
握手を交わす永田行博学長(左)、
澁澤洋 前日本政策投資銀行南九州支店長



天井の竹炭ボード

▶ 附属小学校の天井に竹炭ボード

附属小学校では、本年3月に完了した校舎改修(1期)工事で、教室のほか廊下やトイレなどの天井面積約2300㎡に県産のモウソウチクを主材料とする竹炭ボードを使用しました。このように大量な使用は国内では初の試みです。

この竹炭ボードは、県内の建築関係5社でつくる協同組合ケトラファイブ(蒲生町)と本学農学部が共同開発した製品で、シックスクール症候群の原因とされるホルムアルデヒド等の有害化学物質や生活臭の吸着、調湿効果があり、廃棄時には土壌内で分解されるエコ建材であり、かつ難燃材料であるという特長があります。

また、今回の校舎改修では、耐震補強を兼ねたワークスペースの増築を行い、教室と廊下を移動間仕切りにしたことで、多様な学習形態が可能となり、環境への配慮と児童がのびのび過ごせるゆとりある学習環境が整いました。

▶ 寄附講座「医療関節材料開発講座(日本メディカルマテリアル)」を設置

大学院医歯学総合研究科は、6月に日本メディカルマテリアル(株)からの寄附により、寄附講座「医療関節材料開発講座」を設置しました。寄附講座の設置期間は5年間で、寄附金は年間2,200万円、5年間で総額1億1千万円となる見込みです。現在、本学には臨床予防医療講座(医歯学総合研究科)と4月に設置した焼酎学講座(農学部)の2つの寄附講座があり、本寄附講座が3件目。

同講座では、高齢化社会で需要が高まっている人工股関節や人工骨頭の研究を行い、少人数手術、最小侵襲手術手技(MIS)のための確立や器具開発にも取り組むこととしています。特に鹿児島県は、全国でも上位の高齢者県であり、高齢者に多い運動器の障害、なかでも関節疾患に関する研究を進めることは、意義深いものと期待されています。

▶ 鹿大OBが活躍する楠声会合唱団

「楠声会」(なんせいかい)(米島律郎会長)は、鹿児島大学男声合唱団フロイデ・コールのOBによって昭和28年に結成された合唱団です。鹿児島・東京・関西・福岡・長崎・熊本・宮崎に支部を持ち、それぞれの地域で合唱を続けています。

鹿児島では、毎年の県合唱祭のほか、小・中・高等学校の芸術鑑賞会や地域の音楽関係イベント、鹿大の入学式などで、そのたくましくも美しいハーモニーを披露し、好評を博しています。平成9年には鹿児島県芸術文化奨励賞を受賞、2003(平成15)年には創立50周年を迎え、昨年は奄美公演も果たしました。

「いつまでも青春! ~NEXT50~」を合い言葉に、今後もさらにその活動の幅は広がっていくことでしょう。

【第6回楠声会合唱団演奏会】

2006年11月25日(土)午後2時から宝山ホール
(鹿児島県文化センター)にて開催します。
*チケットなどについてのお問い合わせは
TEL 099-282-3422(米島)まで



創立50周年記念演奏会の様子



鹿児島での練習風景。鹿児島弁が飛び交う和やかな雰囲気の中、週1回の練習が行われている

▶ 稲盛和夫京セラ(株)名誉会長が講義 ~遠隔授業システムを使って東京会場に配信~

京セラ(株)名誉会長の稲盛和夫氏による講義「ベンチャービジネス論/実践論-『実学』」を去る7月12日に稲盛会館で開催し、講義の様子は東京会場(キャンパスイノベーションセンター)にも配信されました。

稲盛氏の経営哲学をベースとした人材養成教育を行うために昨年度設置した稲盛経営技術アカデミーでは、インターネット回線を活用した双方向の遠隔授業システムや教育コンテンツの開発事業を現在進めており、今回の講義は、インターネット回線を利用した遠隔授業の技術開発にめどがついたことから行われたものです。

講義の中で稲盛氏は、一部の企業で横行している『利益至上主義』に対して警鐘を鳴らすとともに、リーダーの人間性が企業の経営に大きな影響を与えることをあらためて強調しました。



講演する稲盛和夫
京セラ(株)名誉会長

▶ 鹿児島県北部豪雨災害に関する 調査チームを編成

7月22日から23日にかけて鹿児島県北部は未曾有の豪雨に見舞われました。この豪雨で5名が犠牲になり、3000戸を超える住宅が被害を受けました。被害総額は250億円超といわれています。

この災害の実態を把握し、災害の原因を究明することを目的に、法文学部、理学部、工学部、農学部と総合研究博物館の教員17名の全学的な調査チーム(リーダー:下川悦郎農学部教授)を編成しました。

本調査チームは、1) 気象要因の分析、2) 河川災害の原因分析、3) 土砂災害の原因分析、4) 農林地災害の原因分析、5) 道路・都市機能に係わる災害の原因分析、6) 災害の市民生活への影響及び災害時の警戒避難の在り方について、現在検討を行っています。今回の調査研究による成果については、報告書にまとめ公表する予定です。



被災現場写真
(提供:株式会社バスコ・
国際航業株式会社)
鹿児島県伊佐郡菱刈
町下手仲間で発生した
シラス斜面の崩壊。一
人の犠牲者がでました



鹿大なんでも情報版
Kagoshima University
Information



▶ 第1回焼酎学講座シンポジウムを開催

今年4月から農学部開設された寄附講座「焼酎学講座」の第1回のシンポジウム「再生する焼酎粕～陸・人・海への有効活用～」(実行委員長 前田芳實農学部長)が、8月11日に稲盛会館で開催されました。

基調講演では、鹿児島県観光交流局の木場信人氏が「鹿児島県における焼酎粕の現状と今後の課題」、本学生涯学習教育研究センターの原口泉センター長が「薩摩藩の焼酎リサイクル事情」について講演を行いました。焼酎粕の有効活用に関する事例発表では、養豚飼料、きのこ栽培、せっけん、入

浴剤、もろみ酢、養魚飼料や魚礁など様々な分野での活用法が報告されました。

総合討論では、「焼酎粕は、かすではなく様々な用途に応用できる材料で“宝の山”である」、「かすと呼んでいてはダメで有価物であるとイメージさせる新語をつくるべき」などの意見が出されました。

焼酎粕の有効活用をテーマに、産官学の関係者が一堂に集まって開催したシンポジウムはこれが初めてで、会場には県内外から合計335名の方が来場され、終始、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。

▶ 行事予定 (2007年1月～3月) どなたでも参加できます。皆様方のご来場をお待ちしております。

教育学部美術科・教育学研究科「卒業・修了作品展」

平成19年2月20日(火)～25日(日)

●24日(土)：午後1時から論文発表会(黎明館講堂)

鹿児島県歴史資料センター黎明館1F(入場無料)

(開館時間：午前9時～午後5時)

教育学部音楽科・教育学研究科「卒業・修了演奏会」

平成19年3月3日(土)

午後4時開演

鹿児島市民文化ホール第2(入場無料)

お問い合わせ▶鹿児島大学教育学部音楽・美術事務室 ☎099-285-7901

職員の給与水準等について

お知らせ

本学の役員報酬・職員給与の水準(平成17年度)等について、本学ホームページで公表しています。

<http://hh.kuas.kagoshima-u.ac.jp/jkougai/johokougai.htm>



(表紙イラスト)

●世界を舞台に

鹿大ならではの教育・研究を世界を舞台に活かすことは、日本の財産となるばかりでなく、鹿大自身のブランド力をも高めることにつながる。さまざまな専門分野・国籍の人々が一つの目標に向かって力を発揮する鹿大の国際貢献を、オーケストラに見立てて表現している。

本学は、地域の知の拠点として、鹿児島という地域の特性を最大限に生かした教育研究を行っています。この「鹿児島大学ブランド」ともいえるべき教育研究の方法論の延長上に本学の国際貢献があります。

本誌ではその代表的な二例を紹介しました。いずれも鹿児島大学の位置する地域と関係の深い東南アジア諸地域を中心としたものです。松岡水産学部長は、将来は、「鹿児島大学フィリピン分校」をつくるのが夢と語り、嶽崎教授は、鹿児島の離島医療のノウハウを生かせる世界の島嶼地域を中心とした国際貢献を今後も続けていきたいと語っています。

「鹿児島大学ブランド」としての〈鹿児島地域学〉は、新たに設置した国際戦略本部を中核として、今後さらにその世界を広げていくこととなります。

広報誌等編集専門部会会長
中島あや子

編集後記

ご感想・ご意見は鹿児島大学広報誌等編集専門部会(総務部総務課広報室 広報・情報公開係) 電話099-285-7035/E-mail sbunsho@kuas.kagoshima-u.ac.jpまで。